

親が子育てを楽しむための子育て支援活動 — 現行の親子参加型活動からの検討 —

小島 千恵子

1. 問題意識と目的

今日、地域社会では子育て支援をさかんに行うようになった。1994年のエンゼルプランに子育て支援という言葉が誕生して15年、子育て支援という言葉も社会の中で一般的に使われるようになった。子育て支援の政策内容も、その時々而起きている親子を取り巻く問題を捉えながら展開されている。現在は、2005年に成立した次世代育成支援推進法(概ね10年間の時限立法)に基づき、国を挙げて子育て支援に取り組んでいる最中である。これらの政策は、1990年の「1.57ショック」といわれる少子化の認識が一般化した時から始まっている。

かつての日本は、子どもは授かるものであり、子育ては、母親が家庭にいて行うというのが社会の常識であった。しかし、経済の高度成長や女性の高学歴に伴い、女性の社会進出が著しくなり、女性の生活スタイルが、結婚して子どもができた後も働き続けるというものに変化してきた。女性が仕事と子育てを両立するためには、職場の管理者や職員の受け入れ姿勢や、様々な環境の整備はもちろんのこと、子どもを預ける保育所が確保されているということが必要になる。ところが、次世代育成支援推進法に基づき、数値目標を掲げて取り組んでいる現在でも、保育所の待機児童の問題はいまだ解決されておらず、経済不況で家計を支えるために働きたいという主婦の増加も重なり、待機児童はさらに増えている。働く女性を支えるための育児休業制度も中小企業などでは整っていないところが多く、派遣社員や臨時職員においては、制度すら利用できないというのが現状である。また、仕事と子育ての両立を応援する意識や体制も整っておらず、子どものことで休むこともままならないことも多いようである。

これら現状から多くの女性は、仕事を続けたいという気持ちはあっても、結婚して子どもができたなら仕事を辞めなければならないという選択を余

儀なくされるのである。そして、「結婚はしない」「子どもはつくらない」という意識につながっていくことになるのである。また、仕事と子育ての両立を決め、頑張っている子育て中の親、特に母親には、肉体的にも精神的にも大きな負担となるであろう。ましてや子どもをつくるのか、つからないか、考えた挙句に選択をした「両立」がうまくいかなければ、そのストレスは大きく、子育て意識に大きな影響を与えていくことになるのはいうまでもないだろう。親子の関係には、親の子育て意識が大きく影響することは、先人のさまざまな研究で明らかにされている。親の生育歴はもちろんであるが、社会における親のストレスが家庭に持ち込まれ、家庭での養育態度の変化や養育能力の低下を引き起こし、虐待やDVといった重大な問題にまで進んでしまうことも多く、新聞などの報道を見聞きするたびに心が痛む。

先にも述べた女性の子どもの産まない選択について柏木(2001)は、「子どもを産むことが社会や家のためだけでなく、女性にとってプラス/マイナスの価値を比較検討してのものとなってきた状況の中で妊娠/出産を経験したいからとの理由が若い時代で強まっている。かつては本人が希望する/しないにかかわらず、結婚し性があれば否応なくやってきた妊娠/出産が選択の時代となった」また、「非難されるべきは、妊娠/出産への強い動機がありながら、それを実現できず、不本意に少子にさせる日本の社会のありよう」だとも重ねて述べている。「授かった子ども」であったものが、さまざまな要因から、結婚、妊娠、出産が選択の時代となり、「つくる子ども」になったというのも、日本の社会が招いた結果であることを、国がしっかり受けとめて考えていかなければならないことだろう。また、結婚や子育てに拘束された生活よりも、ひとりの人間としての自立を志向する傾向や結婚や子育てにともなう煩わしさや負担を避けたいという考えを持つ女性が増え、非婚の

増加を招いているという現象を、一種の流行のように情報として取り込んだ同世代の女性が、結婚や出産についての考え方に影響を受け、結婚、妊娠、出産を選択しないということも考えられる。女性が自分自身の考えをしっかりとって、自分のライフスタイルをじっくり考えることができるという方向に導いていくということも課題であると考える。

しかし、周辺の一般的な子育て世代の若者を見ると、晩婚の傾向ではあるものの、結婚、妊娠、出産を選択し、「ママ友」なる仲間同士で子育てを楽しんでいる人も多いようである。また、筆者が大学の授業でかかわる学生160人に「結婚したら、子どもは欲しいか」と聞いてみたところ、大半の学生が「子どもは欲しい」(98%)と回答し、子どもが欲しいと回答した学生に、産みたい子どもの数について聞いてみると、「2～3人」(98%)と回答している。子どもが欲しい理由については、「親になってみたいから」とか、「子どもを持つ感動を体験したいから」「愛している人の子どもを産みたい」という子どもを持つことへの憧れのような発言が多かった。また、実際に育てることについては、経済的な支えがあれば育てられる(56%)という回答が多かった。今まさに育ててもらっている自分と親の関係に置き換えて、自分に子どもができれば、自分の親のように子どもを育てる自信はない様子がうかがえた。近い将来、結婚して子育てをする次世代は子育てについて、「子育ては条件付きで選択する」あるいは、「子どもは欲しいが育てるのは難しい」など、子どもを持つことと、育てることは別なことと考えていることが推測された。この実態については、柏木(2001)も「子どもを産み育てる世代の女性が、子育てに対する経済的負担について、自分が育てられる者として、味わってきた経験から強く感じ取っていることが多い」と述べている。

では、結婚して子育てをしいる世代は子育てについてどのように感じているのだろうか。そこで、子育てサークルや、ママの会などに参加している一人目の子ども(1歳から2歳半)を育てている母親20人に、一人目の出産の状況や、二人目の出産の予定を聞いてみた。一人目の出産は、子どもが欲しかったから結婚後しばらくして出産し

たという即答であった。また、子どもは可愛い、子どもがいることで自分も成長するという、子育てに前向きでプラス思考のコメントも多かった。次に二人目の出産予定を聞いてみたところ、「もうちょっと先で」とか「考え中」、「一人で終わりがかもしれない」という答えが半分以上であった。その理由を聞くと、子育てにはお金がかかるという経済的なことや、「一人目に手がかかる」、「夫が子育てを手伝ってくれない」、「一人目が大きくなって楽になったら考える」、「今の子育てが楽しいので十分」「自分の時間が欲しい」など経済的なことに加え、肉体的、精神的な負担という理由から二人目の出産については消極的な発言が多かった。これらの身近な現状からみても、積極的に複数の子どもを持つとはしない様子が伺える。経済の低迷における不況から、経済的理由で、子どもを産み育てることを選択しない人も多いだろう。

しかし、先にも述べたように、子どもが欲しい、子どもを育てることで自分自身も成長する、子どもから幸せをもらっていると感じている人も少なくない。経済的な問題の解決などは政策として考え、国に計画を立てて実行してもらわねばならないが、子育て中の親の肉体的、精神的負担を軽減することは、身近なところで協力し合えることではないだろうか。子育てを特別なことにはせず、子どもと普段の生活を営む中で楽しさを感じることができる必要があるだろう。そんな生活が、「子どもを育ててみよう」「もう一人産もう」という意識につながっていくのではないだろうか。地域の身近なところで、子どもを中心に、実際に子育てする人も、子育てを支える人も、対等な関係をつくり、ふれあうことを楽しむことができる環境をどのように創り出すのかということが課題であり、子育て支援の重要な視点になるのではないかと考える。

1994年以降、地域社会での子育て支援活動は、子育て支援センターや幼稚園、保育所で行われることはもちろんのこと、NPOや市民団体などもさかんに行うようになり、民間の営利を目的にした幼児教室やセミナー、自主サークルなど合わせると、いつもどこかで活動が行われているようだ。活動内容も豊富であるため、子育て中の親が目的

により、行く場所を選択できる程に増えたといっ
てよいだろう。さかんに行われるようになった子
育て支援活動を有効に利用して、子育てを楽しん
でいる親も多くなったのは確かである。目的に応
じて様々な支援活動や、教室に参加して親子で楽
しみ、そこで知り合った気の合う親子と活動や教
室以外でも一緒に遊んだりすることもあるよう
だ。

地域社会で実際に行われている子育て支援活動
は、行政あるいは、民間の企業、個人がプログラ
ムを作成して提供していることが多い。子育て支
援に関する活動やイベントは、行政窓口で案内し
たり、民間については、ダイレクトメール、イン
ターネット上のホームページなどで案内したりし
ている。これらの情報は、各市町村が発行してい
る広報や子育ての情報誌にも載っており、情報誌
は子育て世代にとってはなくてはならないアイテ
ムのようなものである。教室や活動に参加するた
めには、電話やインターネットのメール、また、直
接窓口にて申し込みをする必要がある。ほとん
どの活動には定員制限があり、申し込みが遅れ
れば参加できないものも多いようである。友だ
ちと一緒に参加するために、当番を決めて電話
したり、窓口に並んだりすることもあるようだ。
これらの活動に参加しながら、自主的なサーク
ルで活動したり、自分流のやり方で自信を持っ
て子育てを楽しんだりしている人もあるので、
参加する側が受け身で、画一的な活動を一概
には否定できないが、子育て支援の活動が始
まって数年、いろいろな活動の親の参加の様
子を見ると、果たしてこれらの活動が、子育
て中の親にとって真に子育てが楽しくなるこ
とにつながっていくことになるのだろうかと思
うと疑問が残るのである。

子育て支援の現状を踏まえた上で、今一度「
子育てを楽しむ」ということはどういうこと
なのか考えてみたい。各家庭の生活に格差はあ
るものの、その時々の問題を捉えて、子育て中
の親をさまざまな角度から支援する動きは、
国レベルで今もなお進行中であり、むしろ手
厚くなっているといっ
てよいだろう。しかし、少子化は止まらず、
親子を取り巻くさまざまな問題は深刻化し
ている。現代社会では、希望が持てない人間
が増えていると言われ、「希望学」という学問
まで生まれて

いる。希望はプラスの感情であり、力強さを
感じるものである。子育てはまさに希望であ
り、力動感があふれるものではないだろうか。
子どもの周りにいる親を含めた身近な大人が、
真に楽しいと感じて子どもとかわることで、
子どもの希望を導き出していくのではないかと
考える。筆者は、親子の育ちにとって真に
有効な子育て支援活動を探るために、幼稚園
や保育所に入園する前の子どもとその親を対
象に行われている、保育園の子育て支援活
動をはじめ、子育てサークル活動などにボ
ランティアとしてかわり研究を進めてきた。
その中で、子どもを遊ばせる方法の指導や
提供、親への育児講座、子育て相談などが
繰り返されるものの、受け身の親が多く、
親の養育力の向上には、なかなかつな
がっていかないという現状も目の当
たりにしてきた。それでも、子育て支援
の役割を果たすべく、日々忙しい保育の
現場の中で、計画を立てて、子育て支援
活動を懸命に行う保育者の姿も見
てきた。

子育て支援活動の現状は、親の求める
(要求) 気持ちと、支援者の求められて
いる (責任) という関係で成り立
ていることが多い。活動に参加
する親の姿勢が、「活動に参加
すると何かしてもらえる」と
いう受け身であるということ
である。子育て支援活動にお
いて、支援者が、「繰り返
し行ってもまた、新たな問題
や課題が出てくる」と嘆くよ
うに、子育て支援活動の目的
である、親の子育て不安や
ストレスの解消、養育力の
向上などに、なかなか成果
が出てこないのは、この求
める、求められる関係に微
妙なズレがあるのではない
かと感じると共に、親が
受け身になっていかないよ
うな、活動のあり方につ
いて再考していく必要があ
るのではないかと考えた。
そこで、子育て支援活動に
参加する親が、子育て支援
活動に何を期待しているの
か。子育て支援活動を提
供する支援者は、どのよ
うな活動が望ましいと思
っているのかを調査し、
子育て支援活動に対する
両者の考え方のズレを
明らかにし、子育て支援
活動に参加する親が、
受け身の姿勢ではなく、
子どもと向き合い、
楽しみながら子育て
することができるよ
うになるための支援
のあり方や方法につ
いて検討を加えた。

2. 研究方法

(1) データの収集

①N市子育て支援センターMにおける子育てサークル活動に参加している0～1歳児の子どもを持つ母親106名を対象に、子育てサークルの年間12回の年度初回に、「子育て支援活動に期待することは何ですか」年度最終回に、「活動は期待どおりでしたか」について、質問紙にて項目の選択および自由記述で回答させた。質問項目からはずれる内容については、その他とさせ、必ず具体的な内容を記述させた。選択項目は2度とも同様とし、項目は以下のとおりである。

・子どもに友だちができる。・子育ての仲間ができる。・遊ぶ場所ができる。・子育ての情報が入る。・子育ての相談ができる。・仲間とおしゃべりができる。・子育ての知識ができる。・その他。

②A県内の子育て支援活動担当経験のある支援者（保育者）35名に、個別及びグループで「どんな子育て支援活動が望ましいと思いますか」というインタビュー調査を行った。所要時間は1人30分程度。直前に項目を呈示し、その後聴き取り筆記した。

③①の子育てサークルでリーダーをしている親5名について個別にインタビュー調査を行った。インタビューは、1人15分から20分程度、サークル終了後に実施した項目は、以下の通りである。

・子育て支援で何をしたいですか。・子育てサークルのいいところはどこですか。・子育てサークルで嫌なことはありますか。・サークルを支援する保育者についてどう思いますか。

(2) 調査期間

2006年11月～2007年3月

(3) 分析方法

データ収集①と②の調査結果を共通の類似性に基づき分類して、親が子育て支援活動に求めていることと、支援者がめざす子育て支援活動が同じであるのか比較した。データ収集③については、5人の対象者から、子育てサークルに対して具体的にどのような思いがあるのか聴き取り考察を加

えた。データ収集①～③の結果から、親に子育ては楽しいと感じさせ、支援者もやりがいを感じることができる子育て支援活動とはどのような活動なのか、支援者がどのような援助をすると、親子の育ちを応援する子育て支援活動になるのか、それらの考え方と実際の方法について検討した。

3. 研究の結果と考察

(1) 調査の結果

データ収集①と②を比較した結果は、Table1.に示すとおりである。回答の共通の項目は、「遊ぶ場所」「母親の仲間」「保育園の子育て支援及び情報」の3項目であった。共通していない項目は、その他として内訳を示した。

Table 1 母親の活動への期待と支援者（保育者）の願い(%)

支援内容	母親		支援者
遊ぶ場所	34		20
母親仲間	25		25
保育園の子育て支援			
及び情報	12		9
その他	29		46
<内訳>			
育児情報	10	ニーズ調査	16
育児相談	10	方法の改善	16
育児知識	9	保育者意識	14

データ収集①（Table1.母親）では2～3項目を選択する親が多かった。その中で一番多かったのが、遊び場ができる（34%）という回答であった。次に子育ての仲間ができるという回答が多かった（25%）。「子育ての情報は入る」「子育ての相談ができる」「子育ての知識ができる」の数値はほぼ同じであった。回答の多かった2項目について選択の様子をみると、「子育ての仲間ができる」を選択している親は、「遊ぶ場所ができる」も選択していた。また、「遊ぶ場所ができる」を選択している親も、「子育ての仲間ができる」は選択していない親もいた。母親たちの具体的な参加状況をみると、ほとんどが仲間で参加して、子どもを遊ばせながら、おしゃべりしているというのが目立ち、単独でやってきて、玩具のあるスペースをみつけて親子で遊ぶ姿や、単独で参加している親子

が、同様の親子に声をかけ、いっしょに遊んでいるという姿などがあった。

この活動への参加は、仲間同士で参加している親子と、単独で参加している親子があることが分かった。仲間がいる親子は、仲間同士子どもと一緒に遊ぶ場所を探していて、単独で参加している親子は、ここで子どもを遊ばせながら、親子共に友だちをつくっていることが推察された。また、この項目以外に、他の活動に参加しているか聞き取ったところ、大半(98%)の親子が2つ以上の別の活動に参加していることが分かった。母親との雑談の中からも、子育ての情報誌やインターネットで親子が集まる場所を検索し、日替わりの計画を立てていることが垣間みえた。

これらのことから、現在いろいろな場所や、様々な方法で行われている子育て支援活動へ参加する親子は、これらの活動を利用して子育て仲間をつくり、仲良くなった親子でいろいろな活動に参加して、子どもを遊ばせながら、子育て情報や子育ての知識や悩みの相談などを行っていることが予測された。

データ収集② (Table1.支援者) では、親子で遊ぶ場所を提供する(20%)ことはもちろんのこと、親子に活動の場を提供することで、母親が子育ての仲間を見つけて欲しいと願っている回答(25%)が多かった。回答の中で多くの支援者は、活動に参加して子育ての仲間を見つけ、その仲間と子育ての喜びや悩みなどを共有して、楽な気持ちで子育てして欲しいと発言していた。支援者は、母親とのかかわりや親子の行動を観察することなどから、親たちが日替わりで、いろいろな活動に参加している現状は理解していることが推察された。あちこちの活動に参加しても子育ての仲間ができない親子もあり、その現状が問題であるとの発言もあった。

親子が孤立することを防ぎ、現状の固定した仲間関係をもっと広げ、新たな出会いから新しい刺激を受けて、親子が共に視野を広げて育てて欲しいと願っている発言が多く聞かれた。親子に友だちができることや、固定した仲間関係を広げるために、計画的に母親の交流会を開催したり、意図的にいろいろなグループをつくって活動したりする内容も取り入れているが、固定した仲間にし

い親子を参加させることの難しさや、仲間の中の母親同士の関係づくりの難しさを語る支援者もあった。

支援者へのインタビューでは、親のニーズに沿って活動を提供するが、活動を重ねるたびに新たな課題が見つかるという発言が多く、親子の現状を理解する難しさや悩み、活動の具体的な改善方法についてなどが話の中心になっていた。活動を繰り返しても、支援者が願う結果につながらない嘆きのようにも捉えることができたが、支援者はその専門性から、親子の現状についてもっと知る必要があり、活動方法の改善をしなければいけないという発言も多かった。しかし、中には日々の忙しさから、現状の事業展開で精一杯であることや、十分親のニーズに応えていると発言する支援者もあり、子育て支援活動に対する支援者の意欲や意識には差があることも分かった。

支援者は、子育て支援活動には、問題や課題が多く、活動の内容についても日々考慮する必要性があることを自覚しているようである。しかしながら、その多様なニーズと問題や課題の多さから、政策や事業を支援者が決められたノルマとして捉え、類似した活動展開になってしまうことや活動場所や時間、担当する支援者の立場や役割などから、活動の内容の幅が広がらないということも少なからずあることがうかがえた。

支援者は、親子関係のあり方や子どもの将来像も見据えたうえで、親への援助のあり方や、子どもの健やかな成長を願って、支援の具体的な方法について模索し続けている。このことは、子育て支援がクローズアップされて、いろいろ政策を考えるようになる以前から変わっていないであろう。しかし、親子を取り巻く生活環境の変化、中でも親の考え方や支援に対する要望が多様化してきたことで、支援の方法も多様にせざるを得ない状況があり、支援者にも多様な力量が求められるのも当然のことである。改訂された保育所保育指針(2009.4月から適用)の第7章にも、職員の資質の向上が謳われている。子育て支援活動は、いろいろな団体が、さまざまな形態で行っている、支援者が保育士の資格を有しているとは限らないが、子育て支援活動を行う支援者にも、これまで以上に高い専門性と技術が求められるのは必

須である。また、親を巻き込みながら子どもの最善の利益を考慮していくという役割も担うことになるだろう。子育て支援活動への参加は、子育てを始めたばかりの親の参加が多い。支援者は、子育てを始めたばかりの親にとって、子育てのモデルになるといっても過言ではないだろう。また、子育ての協働者となって、その喜びや苦しみを分かち合う存在にもなるだろう。このことから、人間性に立った上での、資質や力量の向上が必要であり、親と協働して、子どもの健やかな成長を支援していくという姿勢を求められている。

データ収集③の結果については、Table2.に示すとおりである。

Table 2 子育てリーダーの活動への思い

質問1. 子育て支援で何をしたいですか

回答者A: 引っ越しをしてきて、友だちがなく、このサークルに来て、友だちができた。その後、出かけることも多くなりました。多い人数だと友だちもできないので少人数で活動できるようなもの がいいですね。そうすればいろいろな話もできるし、困ったことの相談もしやすい。先生に相談することもできるけど、ちょっとしたことなんかはママ友に気兼ねなく聞けた方がいい から。

回答者B: せっかく保育園で活動しているんだから、歳の大きい保育園の子どもとの交流がしてもらいたい。そうすれば、次はこんなことができるんだって、楽しみにするでしょ。

保育園のことについてもわかるし、先生に具体的に保育園のことも聞けるし。保育園の体験活動なんかも取り入れて欲しいな。

回答者C: もうすぐ入園だから、保育園なんかの情報を交流会なんか開いて、情報交換したい。その中で子育ての相談なんかもできるといいね。あんまり 多人数の活動は、いろいろ気を遣うから少人数がいい。

回答者D: 小さいグループで、いろいろ話せる活動がいい。 サークル活動の相談をするこの準備会が好きですね。活動は大人数でもいいけど、実際に親しくならないと、子育ての相談もできないから。本当に専門的なことは先生相談して、簡単なことは普通の会話の中でしたい。 この準備会だと、親しい友だちもできて、先生とも近くなれるからいい。

回答者E: 園児との交流がしたい。お兄ちゃんが入園してるから、お兄ちゃんやその友だちと、保育園で交流できたら楽しいね。でも、保育園もいろいろ

あるから無理かな。保育園の先生に気軽に悩みが話せるから、リーダーをやっているんです。多人数だとゆっくり相談もできない。相談するには、別の時間でしなきゃいけないそうだから、気軽に話せないでしょ。もっと、少人数の活動で、気軽にいろいろなことが話せて、その中で子育ての相談ができるとありがたんだけど。

質問2. 子育てサークルのよいところはどこですか。

回答者A: 安心して来れます。保育園だから専門家もいるし、安全でしょ。家ではできないこともできるし、子育ての参考になることが多い。友だちができます。私も子どもも。

回答者B: 入園が近くなったから、入園準備してる感じ。園に慣れてくれるといいと思って。先生とも親しくなっておいた方がいいしね。家も近いから、もっときたいんだけど。

回答者C: 毎月楽しみです。家も近いし、保育園は安心。子育ての専門家もいるからね。家でできないこともたくさんできる。

回答者D: 近所のママと親しくなれる。近くに住んでいても知らないことが多いから、ここに来ると、近くにどんな人が住んでいるのかわかる。安心安全だよ。なんでも相談できるし、子育てのこと勉強できる。

回答者E: 唯一の外出先なんです。来る回数が多くなるから、リーダー引き受けました。これから、友だちができるといいと思います。先生とも近くなれるし。

質問3. 子育てサークルで嫌なことはありますか。

回答者A: 回数が少ない。もっとやって欲しい。時間も短いね。

回答者B: 回数が少ないし、時間が短い。もっと近くでやって欲しいというのが本音。でも、来られる所があるからうれしいけど。

回答者C: 毎日ここであるといいのと思います。近いし。保育園の子どもともっと遊びたい。

回答者D: 回数ももっとあるといい。もっと長い時間やってくれるといいね。

回答者E: 保育園で自由に遊びたい。大きい子どもさんとの交流ができると思う。

質問4. サークルを支援する保育者についてどう思いますか。

回答者A: 子どもの名前を覚えて呼んでくれるから、うれしい。

すぐに、名前を覚えてくださるなんてすごい。優しいよね。話しやすいし。担当が変わって欲しくない。入園したら、担任になって欲しいから、それまではこの担当して欲しい。

回答者B: 子どもは、先生が大好きです。優しいし、話しやすい。みんな同じようにかかわってくれる。

- 回答者C：もっと話したいですね。忙しいから、先生。メールでサークルのことなんかがくるから、返事するんだけど、その返事が来ない。一人の先生じゃないから、贅沢はいえないけど。
- 回答者D：みんなに平等にかかわってくれる。優しいから話やすい。親身なって相談にのってくれる。
- 回答者E：気軽に話せる。先生も気軽に声をかけてくれるからうれしい。子どもはみんな先生のことが好きだよ。私も好き。

質問 1. について 5 人の回答者に共通する回答を類似性に基づいて、項目にまとめると、子育て相談について、小グループでの活動について、入園体験について、園児との交流についてであった。子育てサークルのリーダーをしている親ということもあり、活動場所である保育園のことをよく知っていた。保育園の状況をわかり、保育園のことを気遣いながら話す母親ばかりであった。保育園で行われていることを有難いと思っていて、その上での願いということのようであった。保育園という場所をもっと有効に使って、少人数での活動を望んでいることがうかがえた。

質問 2. について同様に項目にまとめると、保育園という公共の場所での活動だからいい、家から近く、行きやすいなどの、親子が出かけていく場所の条件について、子育ての専門家がいる、子育ての参考になる、入園する時の情報が入るなど、受け入れてくれる人の条件について、地域の友だちができる、安心、安全だからいいという、安定した子育てができることについてなどであった。保育園という公共の場所で、子育ての専門家の話がすぐに聞けることに魅力を感じて参加している様子がうかがえた。

質問 3. については、回数が少ない、時間が短い、もっと近いといいなど、子育てサークルの方法や内容への要望が多かった。とてもいい場所だから、もっと開催して欲しいという願いを訴えていた。

質問 4. については、支援者についてどんな印象を受けているのか尋ねてみると、5 人共、専門性や人柄などすべて好印象であり、親子共に好感を持っていて、子育ての良き理解者であり、安心していろいろなことを話せる支援者であるということだった。子育て支援活動の実施については、

行われる場所や支援者が大切な要件であることは、認識していたが、場所の条件以上に支える人の存在が大きいことを、改めてこのインタビュー調査で確認した。

(2) 支援活動の要件についての検討

母親は、気軽な気持ちで、子育て支援活動の場を遊ぶ場所として捉えていて、いろいろな活動に参加しながら、自分があるいは、仲間と一緒に出かけやすい場所を探していることが推察された。支援者は、子どもの育てや、親の発言、行動、親子関係の現状から、子育て支援は難しいとしながらも、必要性を感じ、その専門性から親子の成長を願い、支援のあり方や方法、内容について常時模索している様子がうかがえた。親子は、いつでも気軽にふらっと行って、遊びたいと思っているのに対して、親子にとって何かよいものを提供しなければいけないという、使命感のようなものにとらわれ、少し考えすぎなのではないかと思わせるような重責を調査の中で感じた。

親は、子どもの健やかな成長を願い、子どもの将来のことを考えてはいるが、毎日の生活の中で、子どもの行動に一喜一憂しながら子育てに奮闘し、その中で疲れているというのが社会一般の認識になっている。だからこそ、子育て支援の政策が進んでいて、少しでも子育ての負担を軽減して、若い世代にもっと子どもを産み育ててもらいたいと、社会は考えている。支援者を含めて、社会の誰もがみんな分かっているからこそ、「子育て支援はとても重要なこと」「援てあげなければ」という思いが先行してしまうこともあるだろう。思いばかりが先行して、親が普段の生活の中で、普通に手助けするという真の支援ではなく、イベント的になってしまうことが多いことがうかがえた。子育て支援活動に対する考え方や活動の方法が、専門性があるが故に、親の目線から微妙に外れていることがあることがあるようだ。支援者は、「忙しいが、親子の育ちにとって子育て支援は重要な仕事である。難しいけれど、役割を果たさなければ」という思いを持って、子育て支援活動に一生懸命取り組んでいる支援者も多い。この思いが、親子に伝わるように、親子と支援者が活動に参加する意識や姿勢をできるだけ近づけてい

く必要があるのではないかと考える。親が、気負わず気軽に活動に参加できることを望んでいるように、支援者も、肩の力を抜いて、構えずに子どもとかかわることの喜びや楽しさを真から感じる必要があるだろう。この様子を親が近くで観て、その喜びや楽しさを共有することが、親も新鮮な気持ちで子どもと向き合い、新しい刺激を得て、子育てしていくことができるようになるのではないかと考えた。その結果、調査も踏まえて、子育て支援活動のあり方について、以下のように要件を5つに整理した。

1. 家から近く、安全で安心できる場所。

人の目が行き届く、保育所などの公共の場所がいろいろな面で安心できる。

2. 子育てについての専門家が支援者で常駐しているあるいは、担当者が決まっていること。

特別に専門機関に行かなくても、子育ての悩みを相談できる気軽さがほしい。常駐している支援者の人柄も大きな要件である。

3. 少人数での活動がよい。

活動の規模が大きくなると気軽さがなくなる。友だちもできにくい。単独で参加すると孤立してしまう。支援者が遠い存在になる。落ち着いた雰囲気なくなり、じっくり参加できない。

4. 毎日行われていて、好きな時間に行くことができる。

毎日開いて、長く行っていることで、子育て中の親が都合のよい時間に行くことができ利用しやすくなる。自分の毎日の生活時間に合わせて出かけることができるため、子育て中の生活時間にゆとりができる。また、日常生活の中で、いつでも行く場所があるということ、子育ての孤立感を防ぐことにもなるだろう。

母親は、子育て支援活動の場を親子で友だちをつくったり、子育て仲間と集ったりする場所として利用している。その場所が出かけやすく、安全で安心できる場所であれば、子どもを遊ばせながら、親の社交場としても活用しやすいようである。公共性の高い、専門家が常駐する場所ということになれば、やはり地域の保育所や、子育て支援センター、児童センターなどで行われている活動になるだろう。施設も十分とは言えないが完備

され、主催者も信頼でき、安全配慮もされた場所である。現在、各地方自治体のすべての地域ではないが、毎日、終日の開場を義務づけられている子育て支援事業、「つどいの広場」が政策として行われている。毎日、終日の開場ということで、利用時間が分散され、時間設定されたプログラムの内容で、人気の高いもの以外は利用者も少ないようで、少人数の活動が利用しやすいという親の要望とも合致している。

家から近い場所すべてで行われるようになるかどうかは難しいことだが、これまでのように、朝の忙しい時間に一生懸命支度をして、出かけて行ったら終わっていたということはなくなってきているようである。以上4つの要件については、政策の中で実現できつつあり、提供される場所も増えてきている。

政策として4つの要件が満たされることは、主催者である地方自治体が前向きに検討すれば容易なことであるが一番の課題は、支援の方法と内容ではないかと考える。親子で自由に遊ぶことを見守るだけという方法もあれば、タイムスケジュールに沿って活動するという方法もある。親のほとんどが、プログラムの提示を求めている、主催者はその要求に応じて、活動のプログラムを配付しているようである。そのプログラムを見て、興味や関心のある活動に参加する親子が多いということであった。

子育てサークルに参加している親子との交流会や雑談の中でよく耳にするのは、「子どもとどうやって遊んであげたらいいのかわからない」「サークルに参加すると、遊びの方法がわかる」「先生と遊んでもらえる」という、子どもとのかかわり方や遊びの方法、遊んでもらえることなどについてである。このことに着目して、要件の5つめの具体的な方法と内容について提案していくことにする。

5. 具体的な方法と内容

保育の専門性を活かして、子どもの育ちと親の育ち、親子の関係の支援を目的とした、具体的な方法のモデルは、Fig.1に示すとおりである。Fig.1の①～④について、具体的に説明を加えた。支援者は、Fig.1 Aのようにそれぞれの子ども同士の関係、Fig.1 Bのようにそれぞれの親同士の

関係、Fig.1 Cのようにそれぞれの子どもと親の関係にアプローチする。子どもも親も、支援者与其他の子どもとのかかわり、支援者与其他の親とのかかわり、支援者与其他の親子関係とのかかわりを見て、気づいたり、学んだりする。

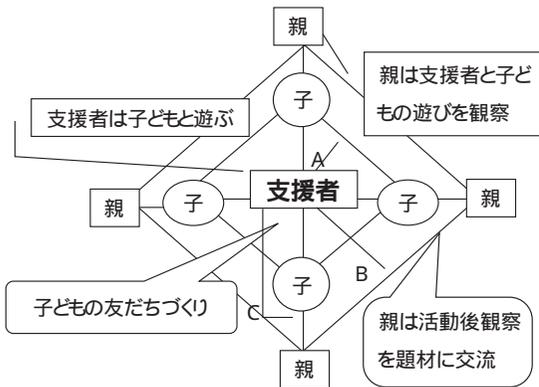


Fig. 1 子育て・親育ち・親子関係の支援方法のモデル

・ Fig. 1 ① 支援者は、親が活動に参加する中で、「子どもと遊んでもらえる」「遊ばせ方が知りたい」という期待していることに徹底して応え、専門性を活かして、子どもと一緒にいろいろなことをして遊ぶ。遊ばせながら、子どもが友だちをつくる援助をする。

・ Fig. 1 ② 子どもは、支援者といろいろな遊びを経験する中で、周りの友だちに目を向け、友だちの行動に興味を持ったり、関心を持ったりしながら、遊び方や友だちとのつながりを深めていく。親から離れられない子どもは、無理強いせず、親も一緒に参加し、子どもの様子を見ながら遊ぶようにする。

・ Fig. 1 ③ 親は、子どもと支援者が遊んでいる様子の中で、子どもが友だちとどんなふうにかかわっているのか、どんなふうで遊んでいるのかなどを見ながら、少し離れた所から子どもの癖や性格などを観察したり、支援者が子どもとどのようにかかわっているのか見て、自分の子育てで困っていることの参考にしたり、よりよいかかわり方を見つけたり、直すという点に気づいたりできるようにする。

・ Fig. 1 ④ 支援者、親子両者で、支援者と子どもの遊びの終了後あるいは別の日に、遊びの内

容や支援者と子どもとのかかわり、子ども同士のかかわりの様子について、気づいたことを意見交換したり、感想を話したりする。

保育所などで、親の育ちを応援する事業として、親が子どもと一緒に、一日保育体験をする事業を取り入れているところもある。この場合、親が保育を経験した後、親と支援者が、1対1でカンファレンスを行うが、それとは違い、ブレインストーミングの会議様式を取り入れて、自由な雰囲気の中で、好きなように発言していくようにする。まとめも記録もせず、子どもの育ちや自分自身のことなど、親も支援者も、気構えや負担感なく発言したり、他の人の話を聞いたりして、自分の気づきにしていけるようにする。

(3) 「子育てを楽しむこと」について

親はもちろんのこと地域社会は、子どもの誕生を望み、喜び、子どもの豊かな成長を願っている。かけがいのない社会の宝物である子どもの存在は大きいのである。しかしながら、親が現実に向き合う毎日の生活は、このようなきれいな事では済まないことが多い。この現実をしっかりと受けとめて、大変なことも多いけれど、子どもを産み育ててよかったと思えるように社会を創っていくことが大切だろう。もっと言うならば、日々の生活の中で、「子育てって楽しいよ」という親が増えることが必要であり、それが次世代に受け継がれていく少子化対策であり、子どもの豊かな成長を促すことにつながっていくのではないかと考える。

本稿でこれまで述べてきたことから、子育てにとって最も重要なポイントとなる「子育てを楽しむ」ことについてまとめていくことにする。子育て支援活動が行われる場所や、開場されている日にち、時間、担当する支援者の資質や力量の重要性についてはこれまでに述べてきた。親が自分の生活スタイルや、日々の生活時間に合わせて、いつでも気軽に外へ出かけていくことができる自由性が、子育てにおける孤立感を和らげることにもつながるだろう。具体的な内容や方法については、子育て支援の現状や調査の中から検討を加えたものを、本稿3-(2)の支援の要件の中で提案した。活動の実際は、地域性や親のニーズ、活動を行う施設や支援者の考え方によっていろいろであ

る。どのような活動内容であっても、その中で大切にしたいことは、支援される側も、支援する側も受け身にならず、子どもと対等にかかわることではないだろうか。子育ての中心は、特別な場合を除いて親が行うことが多い。しかし、親とのかわりだけでは、経験が偏ったり、経験不足になったりすることもある。そこを補うのが、親子を取り巻く周りのいろいろな大人ではないだろうか。子どもの成長過程の中で、親（家族）でも、先生でもない大人という存在は、社会性を身につけたり、人間関係を学んだりするために大きな役割を果たすだろう。幼い子どもにとって、親子で参加する子育て支援活動で出会う支援者は、子育てに親と対等な立場でかわり、親子と一緒に泣いたり、笑ったりする、親でも先生でもない、大人の第一号になるのではないだろうか。そして、支援者は、活動の中でたくさんの親子とかかわり、子ども同士、親同士をつないでいく重要な役割を果たすことになるだろう。そのためには、子どもも、親も楽しめる活動内容を考えて、仕掛けていくことが必要である。それは、特別に何かしてあげるのではなく、普段のかかわりの中で、みんなが楽しさを共有できるようにすることを最優先に考えていくことが必要だろう。

ある街づくりのシンポジウムの中で、パネラーが自身の実践例を取り上げ、コミュニティの拠点をつくる時、唯一約束したのは、「人に迷惑をかけること」と話した。活動を展開する時、規約や規則をつくるころがほとんどである。そして、人に迷惑をかけないようにすることを、暗黙の了解にする。無神経に勝手な行動を取る人に、内心腹をたてるものの、周りの人々に気を遣い、面と向かってはそのことを告げられないでいるという経験は、誰にもあるのではないだろうか。一般常識から言えば、「人に迷惑をかける」という約束をつくるということが考えられないことである。しかし、実際活動をする中で、気を遣ってばかりしていたら、その活動は楽しくないだろう。「人が集まったら、迷惑をかけ合うのはお互いさま」ということを、暗黙の了解にすることができたら、子育て中の親子にとっては、何より嬉しい活動の場になるだろう。気を遣わず活動を楽しみ、みんなが活動の中で、「ああ、楽しかった」と顔を見合

わせて、心の底から笑い合うことを支援する人も、支援される人もみんなで共有することが、子育てを楽しむことになるのではないかと思う。これは、言うことは容易いが、継続して実践し、支援者が変わったり世代交代したりしても、変わらぬ思いが受け継がれていくことは難しいだろう。活動や変わらぬ思いを継続し、参加者に浸透させていくことは、あきらめずコツコツと、活動に取り組む姿勢を保ち続けることが大切だろう。また、支援者が子育ての専門性を身につけていることを活用して、活動のコーディネーターとなって、今あることを使いこなして、そこにいるみんなにとって心地のよい場所にする、さらには、それぞれの人のつながりから、多様な人たちがそこに集まってこられるように仕掛けることができるようになることが望まれるだろう。子育て支援活動の支援者は、子どもに関することについての専門性もさることながら、その人自身の人柄や醸し出す雰囲気も専門性になるのかもしれない。また、活動自体がその地域に定着していくと、その活動そのものに多様な人が集まってくることになるのではないだろうか。地域の中で多様な人が集まって、「みんなでワイワイ活動（遊ぶ）すること」が、子育てを楽しむことになり、その中で子どもが育ち、親が親らしくなっていくことになるのではないかと考える。

4. まとめと今後の課題

子育て支援への取り組みが積極的になっておよそ15年が経った。この間、社会情勢の変化や、親子を取り巻く社会問題の増加などから、政策として、さまざまな取り組みがなされてきた。これらの取り組みは、子育てをする親たちにとって、子どもを産み育てやすい環境が整備され、子育てがしやすくなったと考えられる。しかし、現行の子育て支援活動をみると、実際の生活の中の普通の営みではなく、親の支援を中心にした、イベント的な取り組みがまだまだ多いように感じる。子育てをする人も、支える人も子どもを真ん中に据えて、対等に子どもにかかわり、育てるといえるにはいかないようである。いつの時代も子どもを育てることは楽ではないし、助けてもらうということもしかたのないことだろう。子どもとのかか

わりの中で、子どもの無邪気な笑い声を耳にしたり、安らかな寝顔を見たりして、ちょっとした瞬間に、子育てをしている喜びを感じたりすることはあっても、日々の生活に翻弄され、「子育てを楽しむ」というまでには、なかなか辿り着けないのではないだろうか。先にも述べたが、自主的に子育てサークルなどを立ち上げて、仲間と一緒に助け合いながら、子育てしている親も多いので、一概に親が受け身であるとは言えないし、子育て初挑戦の親は、知らないことを知りたい、疑問や悩みは解決したい、子育てを一緒にする友だちが欲しいと感じるのは当たり前だろう。親にとってどれも皆未知のものであり、経験を重ねて親になっていくのである。親は、あくまでも純粋に、子どもにとってよりよい親になりたいと考え、試行錯誤を繰り返しているのだろうと推察される。そうするとやはり、支援する側が、普段の生活の中で親が自ら子育てを楽しむための活動について、活動のあり方や具体的な内容、方法について再考していく必要があるだろう。

児童虐待の増加などから、筆者はこれまで親の育児不安、子育てによる孤立感や、閉塞感などを軽減することが重要な課題であると考えてきたため、子育て支援の中でも、今回の調査や、活動について本稿3.(2)の5のFig.1に示すモデルのような考え方や、具体的な方法の検討のように、出生から幼稚園、保育所への入園前までの子どもとその親への支援を中心に研究を進めてきた。しかし、研究を進めていく中で、次代を担う子どもが、成人するまでを見据えた視点で子どもの育ちを支援する必要性を感じ、その支援のあり方を考えた時、家庭で子どもを養育していく親が、実際の生活の中で子どもと具体的に向き合っていく方法や、知恵を身につけていくことや、地域の大人が、親子と一緒に遊びながら、よりよい親子関係をつくるパイプやクッションになれるような、地域の子育て力を育成していくことを考える必要があることを実感した。

筆者はこの視点から研究を深めるために、地域の中で筆者がコーディネーターとなり、親も含めた多様な大人が集まって、学童期の子どもとそのきょうだいを対象に、夏休み中一緒に遊ぶ活動を始めて3年が経過した。この活動は、年毎に参加

する支援者も親子も増え、年齢層も0歳から60歳代に広がってきた。子どもも親も支援する人たちもみんな一緒に遊び、活動を楽しむということを中心にして、その中で気づきや学びを大切にしたいという思いで、親の中から実行委員を募り行っている。本稿で示した具体的な方法(Fig1.)にある、親とのディスカッションは、行っていないものの、支援者たちが子どもと遊ぶ様子を親が客観的にみることはできるようで、事後に親からは、「知らなかった子どもの一面を見た」「支援者のかかわると、子どもが生き生きとする」という声が聞かれた。また、支援者として参加している大学生からは、「子どもにかかわるのは難しい」「子どもの親と話ができ、親の気持ちが変わり、視野が広がった」「子どものかかわり方が分かった」など、子どもの理解の仕方や、自分自身が親になるということを意識しての発言が聞かれた。この活動の参加対象は、小学校1年生から3年生と、その下のきょうだいと親としており、4年生以上は、活動を手伝うボランティアとして受け入れている。参加者だった子どもが、ボランティアとして参加を継続していくケースもあり、活動の展開がリサイクルしていく兆しも見えてきた。まだまだ課題がたくさんあり、検討を重ねていくことが必要な活動ではあるが、地域の中でジュニアリーダーを育て、リーダーが親になってまた、自分の子どもを参加させることができるという、次世代に受け継がれる活動をめざしていきたいと考えるのである。

今後は、支援される親子にとっても、支援する地域の大人にとっても、「楽しい」活動であり、子どもも親も学生も地域の大人にとっても学びの場になるような活動の内容や方法を検討していくと共に、参加する親子や、活動に参加して支援する側の学生や地域の大人への調査などを行い、それぞれの意識の変化を探り、学びの内容や活動の効果、課題について研究を続けていきたいと考える。

引用文献一覧

- 保育所保育指針(2008) 厚生労働省
柏木恵子(2001) 子育て支援を考える変わる家族の時代に

岩崎ブックレット

柏木恵子 (2001) 子どもという価値少子化時代の
女性の心理 中央公論新書

小島千恵子 (2008) 子育て支援の現状と望ましい
あり方の探究－母親のニーズと保育者の意識調
査を通して－

椋山女学園大学大学院人間関係学研究科人間関係
学専攻 教育学領域 修士論文

参考文献一覧

泉 千勢 (2003) ポストの数ほど親子広場を一地
域活性化の拠点としての「子育て支援センター」
現代と保育55号 ひとなる書房

柏木恵子 (2003) 心理学とジェンダー「女性にと
つての価値」 友斐閣

柏女霊峰 (2005) 次世代育成支援と保育 全社協

小出まみ (1999) 地域から生まれる支え合いの子
育てふらっと子連れでDrop-in！ ひとなる書
房

丹羽洋子 (2000) 母親たちにとっての「子育て支

援」 発達No. 84 ミネルヴァ書房

太田光洋 (2007) 保育所らしさ、保育士らしさを
生かす地域子育て支援を 保育の友 2月号 全
社協

堤 マサエ (2005) 次世代育成支援をめぐる視点
月刊福祉 5月号 全社協

【付記】

本稿は、日本保育学会第62回大会発表論文集
p328

母親が「子育てが楽しい」と感じる子育て支援
活動のあり方の探求を加筆修正したものである。
また、本稿使用の調査結果は、小島千恵子 (2008)
「子育て支援の現状と望ましいあり方の探究－母
親のニーズと保育者の意識調査を通して－」 椋山
女学園大学大学院人間関係研究科 人間関係学専
攻 教育学領域 修士論文に使用した調査に追加
調査したものを使用している。

(研究協力者 鈴木裕子)

Child-nurturing support activity for parents to enjoy bring up a child

—Examination form present parent and child participation type activity—

Kojima, Chieko*

今日、地域社会でさかんに子育て支援活動が行われるようになった。その形態や内容はさまざまであり、親が選択して参加できるほどに進化している。これほどに子育て支援がさかんに行われようになっているにもかかわらず、少子化はとまらないばかりか、親子を取り巻く問題も増加し進行化している。国も子育て支援をめぐる政策を次々と展開し、対策を講じているがなかなか効果が上がらないのが現状である。子育て支援活動の現状をみると、親子が楽しそうに参加し、親同士の交流も盛んに行われ、効果が上がっているように見える。活動に参加している時間は、親子でその活動を楽しみ、有意義な時を過ごしているが、家庭に帰って親子で向き合う時、その楽しさは継続せず、子育ては大変で苦しいものに一変する様子がうかがえる。現行の支援活動を見ると、その方法と内容にあまり違いはなく、パターン化しているように感じられる。現状からみると、今後どれだけ子育て支援活動を展開しても、親の子育て意識が真のところで変化しない限り、子育てを取り巻く問題の解決にはつながっていかないのではないかと懸念される。このことから、親がもっとリラックスして子育てできるように、支援者もいっしょになって、子育てを楽しむことのできるような方法や、内容について検討し、実践できるようにすることを試みた。

キーワード：楽しい子育て，親子，親の子育て意識，子育て支援，子育て支援者の意識